

西川小りん

長谷川時雨

青空文庫

夏の朝、水をたつぷりつかつて、ぎぶぎぶと浴衣ゆかたをあらう気軽さ。十月、秋晴れの日に張りものをする、のんびりした心持は、若さと、健康に恵まれた女ばかりが知る、軽い愉快さである。親しいもののために手軽くつくる炊事の楽しさと共に、男や、貴あなた人の知らない心地であろう。

あたし私はときものの興味を、今でも多分にもっている。背筋の上から、ずっと下の針止めに鋏はさみを入れておいて、ツーと一筋に糸をぬくのがすきだ。それは空想好きの私のよろこんで引き上げた、娘時代の仕事のひとつであった習慣からでもあろう。ときものの糸と共に、つきない空想を、とりとめもなく手たぐりだし楽しんでい

たのである。だが、その習慣がまた、ずっと昔の、あんぼんたん時代の家庭行事の一つに、夜ごと養われていたのでもある。

奥蔵前の、大長火鉢をかこみ、お夜食のすんだ行燈あんどんの許もとの集りは、八十八で死ぬ日まで祖母が中心だった。ある年は、行燈の影絵を写してよろこんだ私だった。ある年は、小切れをもらってお手玉をつくる小豆あずきを、お盆の上で選よっていた。ある年はお手習いしていた。またある年は、燈心を丸めて、紙で包まりんだ鞠まりを、糸で麻の葉や三升みますにかがっていた。ある年は、妹たちときしゃごをはじき、ある年はくさ草紙を見ていた。母はつぎものをする時もある、歌舞伎（芝居雑誌、二六通や水魚連すいぎよれんという連中から贈ってきた）の似顔絵を見ている事もあるが、かき餅もちを焼いたり蕎そば

麦がきをこしらえてくれたりした。女中たちは雑巾ぞうきんをさしたり、自分のじゅばんの筒袖をぬったりした。

思えば、そういう時に、祖母は修身談をきかせたのであった。だが、それが、どんなに面白かつたらう。後にきく種々さまざまな修身談は、はじめから偉そうに、吃々きつきつと、味のない、型にはまりきつたことをいうのばかりだ。それは、語るものが、自ら教えるという賢人面づら、または博識ものしり顔をするからだ。そして、いう事が非凡人のことばかりだからだ。

ところが、祖母おばあさんは面白い凡人なのだ。この祖母、前にも言つたかも知れないが字を知らない。きくところによると無学文もんも盲うとは、落語家はなしかなどにいわせると馬鹿の代名詞だが、決してそ

うでないの、ただ、学をまなばず、字に暗しであるので、文盲とは、文字だけに盲目めくらであるというのだ。この祖母はまさにそれを証拠だてている。心の眼は甚だ明らかであるのに、文字だけが見えないのだ。気の勝った人だったから、あるいは文字をよく空んじていたら、おそらくあんぽんたんの祖母ではなかったろう。

だが、この祖母、一市しせいじん井人として、八十八の老婆で死んだのだが、手習師匠へもつてゆく、お彼岸の牡丹餅ぼたもちをお墓場はかへ埋めてしまったのから運命が定まったのだといえ、人間の一生なんて実に変なものだ。とはいえ環境が人をつくるというが、祖母自身も、好心がなかつたのだともいえる。しかし、徳川文明の爛らんじ熟ゆくの結果、でかたんになった文化の昔、伊勢のお百姓の娘にそ

れをのぞむのは無理であろう。

——大庄家の娘小りんの、美目みめのすぐれていたことも、領主藤

堂家に腰元づとめをしていた花の十八、疱痘ほうそうになつて、許いいなず

婚けの男に断わられようとしたのを、自分の方から先手をうつて

断わつたのは幾章か前に書いた。江戸の兄をたよつて江戸で暮し、

東京で死んだ六十九年、彼女は三十三に私の父を抱いて、通し駕か

籠ごで故郷を訪れたきり二度とゆかない。

子供を理解しない親——それはこの現代にもぎらにありすぎる。

男性的おとこの気象をもつたものにも赤い襟をかけ、島田鬻まげに結わせ、箱

入りの人形のように玩器物おもちゃとして造りあげようとする一方、白おしろ

粉いをつけて、しなしなしたがるようなおんなのようなおとこのこ女性的稟質男子を、鉄

砲をかつがせたり調練をさせたりして、此子はなんでも陸軍大将にする力んでいるのもある。

小りんさんは男性的だった。手習いがいやなのではなく、寺院おてらの夫だいきく人さんが、針ばかりもたせようとするのが嫌だったのだ。

もつとも、近松ちかまつや西鶴さいかくの生なまでいた時代に遠くなく、もつとも義太夫ぎふし節ぶしの膾炙かいしやしていた京阪けいはん地方である。女子おなごに文字を教えると艶いろふみ文ぶんばかり書くと、文字を教えたがらなかつたという土地がら、文盲をつくるのに骨を折つたのであろう。

彼女はお寺の墓地で、竹の棒をもつて男おとこ童わらわたちと遊びあそびくらした。お彼岸まきえの蔘まきえ絵えの重箱むかひの中にはお寺さんへもつてゆくお萩餅はぎもちが沢山はいつている。寺の門近くくると、重箱をもつて来た下男

を帰してしまつて、遊び友達の一日の食料をもっている事に満足した。犬いぬたで 蓼の赤い花の上に座つてお萩をたべる子供たちの、にこやかな頭の上には高い空があつた。文化の昔の女団長の頭の、やつと結わえた蝶々ちようちようまげ 鬘には、赤トンボがとまつている。

「もつと食べよ。」

「もうこんなにお腹なか大きくなつてしまつた。」

あぶらやさんをかけた男の子が胸をのしてみせる。あんこのついた指をしゃぶるものもある。鼻の頭へ黄豆粉きなこをつけているものもある。上唇についた黒ごまと鼻汗はなとを一緒になめているものもある。

そこで困つた事は、残つたお萩の始末で、食べ残しをお寺へも

つてゆけない。

「投げちやえばいい。有難うございましたって、からっぽにしてゆけばいい。」

小りんさんはそうしなかつた。穴を掘って重箱ごと捨ててしまつた。

家うちへかえつて訊きかれると、「捨てたよ」とはつきり自分でした通りをいつた。家のものがいつて見ると、黒ぬり蒔まきえ絵の重箱が、残つたお萩のはいつたまま土中であつたので、かえつて本当だつたのに呆あきれた。

女らしくないといつて、きゆうめい 糺命めいのため味噌蔵みそぐらにいれられた小りんちゃん、大人たちの不当な仕置きに腹を立てた。あやまる

ことなんぞ考えもしなかった。自分のしたことのいいかわるいは子供だから知らないが、つねづね親たち師匠から、人間は正直が第一だ、ことに神宮おおかみの御鎮座ある伊勢は「伊勢子正直いせこししょうじき」と名のあるのを誇りにしているといましめるのに、なぜ正直に言ったことが悪い——それが不足だった。

彼女は、自分をこんなに困らせる家人を、自分も困らしてやろうとばかり考えた。暗い陽ひの遠い味噌蔵ねずみに這はいっている、青大将も怖こわくなければ、いたずらに出てくる鼠ねずみにも馴なれた。

仕かえしは味噌樽だるの中へときまった。彼女は自家用の幾個いくつかの樽たるのなかへおしつこが出たくなると、穴をあけておいてした。味噌かきまわを搔廻かきまわしておいて知らん顔をして、それからおわびをして蔵

から出してもらった。

おや？ この樽の味噌は——あら？ この樽のも——

やがて、日がたつてから、家のものが変な顔をして、味噌汁を吸うのを、彼女は小躍りこおどしてよろこんだ。

「私のしつこを飲んで——」

大人たちは、はじめは何をいつているのかとりあわなかつたが、彼女があんまり伊勢子は正直だ、伊勢子は正直だ、私のしつこを飲んで——と小躍りするので、やっと彼女の悪戯いたずらが、味噌をだいなしにしてしまったのだと感じた。

この祖おばあさん母、江戸へ来て嫁入つて、すぐ大火事にあつて、救米のおむすびをもらった時、傍そばにいた者がお腹がすきすぎて、と

うてい一個の握飯おむすびでは辛棒がなりかねるとなげくと、さつそくに抱えていた風呂敷包に手拭をかむせ、袖の下に寝させたかたちにして、

「お役人様、ここにも一人おります。」

と、まんまと一人分握飯をせしめた。花婿だった祖おじいさん父おとうさんびつくりして、

「お前はおそろしい女だ」

と嘆息したそうだ。昔の町人の考えでは、大胆でも、機智があつても、女らしくない女としたものと見える。メソメソ、グズグズ、ブツブツ、ウジウジしているのが女らしい女としたのであろう。女の人のすべてが低下したのは（祖父をわるくいつてはすまない

が)、こういう男に、扶養されなければならぬ位置に長く長くおかれたからであろう。そしてそういう善人といつていいか、グズ男といつていいか、ともかくそんな男どもの好みにあつた女をつくり、その女が、そういう男の子を生んできたのだと思うと、家の子はどうしてこう低能なんだ、なぞと、学校の試験や親の思う通りにならなかつた場合に、そんな勝手なことはいえないはずだ。

おばあさん
祖母、ある日、

「古道具屋で御櫃おはちを決して買ってはいけない。」
と変な教訓を垂れた。聴いていた壮士荻野六郎が、赤黒い、ズングリ肥ふとった腕を撫なで上げながらへえと腑ふにおちない声で返事をした。

「飯櫃めしびつだけ古道具屋で買ってはいけないのですか。」

「お前が出世前だからいうのだよ。」

毬栗いがりのような男は大いによろこばされた。

「僕が出世前だからでしょう、御教訓によつて米櫃こめびつも買いませ
ん。」

「馬鹿なことは言いなさんな。お前の身分で、古道具屋からでも米櫃が買えればたいしたものではないか、米櫃というものは、入れておける米が買っておけるから入用なので、買っておきの出来ない米なら米櫃は入りはしない。古道具屋のでも結構だから、入れるだけの米が買えるようになったら米櫃もお買いなさい。」

「へえ？　どうもそれは、ちと腑ふにおちませんが——」

彼女の嫁よめじよ女むすめがそばから吹出していった。

「それはね、家で売った飯櫃おほちが、廻り廻って、何処どこで売ってるかわからないので、気にしてらっしやるのですよ。」

壮士荻野六郎にはなおさら話がわからなくなった。すると、彼女の息子も笑って言った。

「俺おれの失敗でね、おつかさん、子供の時の味噌樽式をやったのだよ。」

こんどは荻野六郎にもほぼ解った。彼も吹出したい気持ちで話を誘った。

「俺が酒に酔って帰って来ると、ツベコベいやがって面倒めんどくさいから、蔵くら中へ叩たたきこんで大戸を閉めちやったら、阿母おふくろまで締

めこんでしまつて——」

父はそれがくせの、左の手でやぞうをきめて、新進的代言人らしくもなく、ならずもののような巻舌まきじたで言つた。

「祖母さんおばあが厠はばかりへゆきたくなつたとお言いだから、開あけてもらいましようというと、なに頼みなんぞおしなさんな、先方むこうから悪かつたと開けにくるまで投ほつたらかしておおき、干乾ひぼしにすれば親殺しになるから、だまつていても明日の朝は開けにくるよつて——」

荻野六郎は、それで飯櫃おはちへやつたのだなど、フ、とも、ウともつかないフウーという笑わらいをうなつた。用心のいい祖母は、他家へ火事見舞に、握飯おむすびごと入れておくる新しい大きな飯櫃をつ

くらせておくのだった。それが、蔵の三階の棚にあるのを、勝手に知った彼はよく知っていた。

「だが、売ったのはしどいな。」

そうはいったが、彼もそのほかの所置しよちはおもいつかなかつた。

「なるほど、孫子の代まで、古道具屋の新らしい飯櫃は買うなど申しつけます。」

彼は笑い笑い頭をさげた。

世の中の物騒な時分、祖父母夫婦は奥蔵の二階に寝ていた。あの夜押込みがはいつて、祖父おじいさんの頬つぺたを白刃しらばで叩たたいて起した。祖母は小さな声でみんな出してやれといった。祖父は階下したに

おりて金函かねばこの前にすわったが、手が顫ふるえて手燭てしよくへなかなか火がつかなかった。

祖母はその間に厠はばかりへゆくふりをして、すっかり家うちじゆう中ちゆうを見てきた。外に見張みはりが一人いるのが蔵の二階の窓から月の光りで見えた。祖母がすっかりすましてきても、金箱の鍵かぎがあかないで、祖父は盗人どろぼうにおどしつけられていた。

だが、祖父おじいさん父おぼあさんは祖母おばあさんを信賴しんらいしている。早く出してやれといったが——祖父は頭の上の、階下したから荷物をあげおろしするためにつくつてある簾すの子に、階下したの様子を覗のぞいている祖母の眼を感じた。一枚一枚丁寧に小判を出してやっていたが、そのうちに盗人の方が焦燥あせつてきて早くしろといった。

昔の金は重い。盗人が一足外へ出たと同時に、奥蔵の二階の窓から、激しく、せわしなく「火事だ火事だ」と金かなだら盃らいを叩きたてた。それに応じて店でも騒ぎだした。火事早い江戸だから間かん髪はを入れず近所の表戸が開く、人が飛出す――

盗人も火事だ火事だと怒鳴って逃げようとしたが、火元の方から逃出すものはない、取りかこんでくる人たちに、ものしたものを投げつけて逃げていった。

その祖母が女のたしなみを、いかにも簡明に女中たちにも、子供たちにも共通にはなしてきかせるのだ。その中で、あんぽんたんの耳に残っているのは、祖父が蔵を建てようといった時に一ひとと戸前まえの金が出来たからと悦よろこんでいったのを、

「も一戸前分の金が出来てからになさい。」

と祖母はいった。自分たちの働きの成績を、一日も早く、黒塗りの土蔵にして眺めたいと願っていた祖父は、明らかによろこばなかつた。

ふたとまえ
二戸前分の金が集まった時に、祖母はまたいった。

「も一戸前分出来たらにしましょう。」

さすが温順な祖父も、なぜだと訳をきかないうちは承知しなかつた。

「ものは、思っていたより倍かかるものです。まして、長く残そうと思う土蔵くらを、金がかかりすぎるからといって、途中で手をぬくようなことがあるといけないから、どうしても二ツ建てるだけ

の用意をしておかないとちやんとしたものが出来すまい。」

それは理由のある理窟だから、祖父は領うなずいた。けれど、三戸前みとまえ分なければというのには不服だった。

「それがなぜ、もう一ツ分入るのだ。」

「では、万一、蔵の出来かかった時に天災が来たらどうします。

くら土蔵は出来ましたが、蔵に入れる何にもなくなつて人手に渡しますとは、まさか言えますまい。」

なるほどと思つた祖父はうなつた。現いま今のように金融機関のそなわらない時代のことである。空くうしゆ手で、他人ひとの助力たすけをかりずに働かなければならないものには、それほど手固い用意も必用だったであろうが、その場合の祖母の意見は、もうここまで来たとい

う祖父の気のゆるみを、見通していたものと私は考える。

私という人間は、また、そうした祖母の教訓をうけながら、利にうとく、空手でものごとをはじめめる、赤ン坊のような勇氣？

時折自ら苦笑する、『女人芸術』にしてからが、この祖母の諭めいましを服用していたならば、秋風寒しなんて、しなびはしないであろうに——祖母は十九で自己を建設のために遠く出て来た人、私は時代の激しい潮流に押流された江戸人の、残物の、アブクのようなものをうけて生れて来て、文学をよく知らずに、文学でお金をもらうことを覚えた不覚者、その相違である。だが、服用していることもある。

「芝居などにゆくのは三度を一度にして、そのかわりものを惜む

な。」

芝居——それより娯楽をしらなかつた昔の女は、芝居といったが、それは旅行にも、その他のこともおなじである。これは、当今の、いかに安価に、いかに手軽にというのと、違いすぎる言いかただが、私はいいい教えだと思つてゐる。チビチビ、ケチケチ、ならしにしてなまけてゐるのはいけな^い。自分ばかり愛すと物惜みにもなる。私の母はよく^{つぶや}呟いた。

「あのやかましい^{おぼあ}祖母さんに、十八年も仕えるなんて、なまやさしい辛棒じゃない。」

けれど、また静かに祖母の長い間の教えを思出すと、

「だけれど、あの方にやかましく言われなければ、私なんぞは、

それこそなんにも分らなかつたろう。」

それはたしかにそうで御座いまいしょうと私は言う。あの木魚のおじいさん（前出）と、そのおかみさん（前出）の子で、十三、四に、お前まえはま浜はま一帯、お旗本、士族といわず、漁師までびつくりさせた勇敢な汐汲しおくみ少女（前出）のおたきさんである。むちやくちやな勇氣と働きは、愛されもしたであろうが、辛棒は、祖母の方が多くしたかもしれぬ。

祖母のお友達は変つていた。御隠居さんにちよいとお願いがと、やつてくるものは、家へくる客とは違つて、木綿ものを着て、大層遠慮がちに訪いずれた。だが、

「まあよくお出いだ。」

と祖母が元氣よく玄關に現われると、彼女たちは雄弁になつて奥へ通る。

あんぽんたんは夜泣きをして、父母の室へやから襖ふすまの外へ投ほうりだされて、寒い室に丸くなつて泣寝入りして、祖母に抱いていかれた夜から、ちゃんと心得てしまつて、泣いて室外へ投ほうりだされると、蔵の網戸のとこまで、そつと這はつてゆくことを覚えた。すこし大きくなつてから、夜半よなかに祖母におこされて、お灸きゆうを毎夜すえてあげる役目をもつた。高齢の人には、心のおけないお伽坊主とぎですこしは慰めにもなつたのであろう、何処どこへゆくにもお供ともをさせられるのだつた。

夕御飯ゆうごはんがすむと、お氣に入りの松さんの車で、ソロソロと、

牢屋ろうやの原こうぼうさまの弘法大師へ祖母は参詣にゆく。ある時は毎晩のように出かける。あんぽんと女中とは、ブラ提ちようちん灯とうをさげて車のわきを歩いてゆく。送りこむと松さんと女中は帰っていった。

大安楽寺こうぼうさまの門前までゆくと、文字焼もんじやきやお婆さんと、ほおず

きやの媪おばさんが声をかける。下足のお爺さんは、待っていたように援たすけおろしてくる。本堂にはお説経せいきやうの壇が出来て、赤地錦あかじにしきのきれが燦爛さんらんとしている。広い場処じようれんに、定連じようれんの人たちがちらほらいて、低い声で読経どきやうしていた。

祖母は広い廊下を通つて、おさい銭函せんげんの横の一角の、参詣人が「お蠟燭ろうそく」と階下から怒鳴ると、おーと返事をする坊さんたちの溜たまりの方へいった。そこには大きな角火鉢や、大きな罐かんす子すがあ

って世話人や、顔の売れた信者の、だんらん 団欒する場処ところだった。

時々高野山ほんざんから説教師が派出されてきた。その坊さんが若くて、

学僧らしい顔付きをしていると人気があつた。お婆さんたちがは

しやいだ声を出して御寄附の相談をする。麦酒ビールなら水だから召上

るだろうとか、白足袋を差上げようとか、したおび 禪におこまりだろうと

か——すると、番僧が大火鉢で、ひじ 肘まで赤いたこをこしらえて、

ガンばつてあたりながら、わし 拙僧にもくれよとか、ぞうきん 雑巾の寄附が

すけなくなつたのという。食物をつけとどける人も少くない、毎

晩くる中にも、お茶菓子をかかさずもってくるので、火鉢の辺り

は有ゆう福ふくだった。

おおだな 大店の内儀おかみさんたちは嫁をそしる。中年になつたお嫁さんは、

いつまでも姑しゅうとめが意地わるく生きていると悪あつこ口くちしあうのを、番僧
 たちはうまく口を合せていた。そんな時、祖母は口を決してださ
 なかった。傍はたのものが、あんぽんたんの顔をみいみい、えんきよく円えん曲きよく
 に、母のことに話をむけてゆくと、

「心の鬼つの角つをおりに来て、ざんげなさるのはよいが、後ご生しょうが
 ようござりますまい。家うちの嫁は孝行で、孝行であんなよいものは
 ござりませぬ。」

とやるので、合手あいては苦い顔をしてだまってしまふ。私はそこにも
 厭あきて、錫すずの大壺つぼに酌くみいれてあるお水をもらつて、飲のんだり、
 眼につけていたりする人を眺めていた。

やがて和讃わさんがはじまる。叩か鉦ねの音ねが揃そろつて、声自慢の男女が集

ると、

有うてんりんね転輪廻ねの車より、

さんさんとくとくごごよくよく

三毒五慾の糸をだし

しょうし

生死のかせわのひまいらぬ

さあてもとうとき、おんあぼきや、

べいろしやの、なかもふだらに、はんどく、

じんばら、はらはりたや、うん——

じんばら、はらはりたや、うんが面白くて、いい気になつて

こうおん

高音にうたつた。

そのうちに、香こうぞめ染ぞめの衣を着た、青白い顔の、人気のあつた坊

さんが静々と奥院の方からほのか灰ほのかにゆらぎだして来て、衆しゅじょう生じょうには

背中を見せ、本尊菩薩ほんそんぼさつに跪座立礼きざりつれい三拜して、説経壇の上に登ると、先刻嫁のしを罵り、姑ひとをこきおろした女たちが、殊勝らしく、なんまいだなんまいだと数珠じゆずを繰つておがむ。

お坊さんは、壇の上の独鈷とっこをとつて押おしいた頂ただき、長い線香を一
本たて、捻ねん香こうをねんじ、五種の抹香を長い柄えのついた、真ちゆ
うの香炉こうろにくやらす。そして徐ろおもむに、衣の袖を搔かきあわせ、瞑めい
目合掌くの後、しずかに水晶の数珠をすりあげ、眩つぶやくようにひく
く、

ぢん未来みらいさい——

帰依きい仏

帰依法経——

とかなんとか、涼しい、低くよく通る声で、だんだんに皆をひっぱってゆく。

祖母は、有難い御僧おんそうに、禪したおびの布施をする時は、高僧から下足のおじいさんにまで、おなじようにふたしめ一締ひずつやった。祖母は別段、和讃歌もお経も覚えようとしなかった。松さんがその事を歸りに訊きいたら、
「空念仏そらねんぶつだ。」

といった。では、なぜ毎晩参詣なさいますといったら、こう答えた。

「老人としよりは家うちもすこしはあけてやるものだよ。」

門前の汁粉屋は、人の帰り足をきくと、毎晩かかさず立寄る祖

母と、その仲間のために、おしるこを熱くし、おぞう煮もつくつておいた。もんじやきやお婆さん、ほおずきやおかみさん下足のおじいさんといった仲間が、そのほかにも三、四人はきつとくる。そして車夫の松さんと、迎えにくる女中と、あんぽんたんと、それだけが、あまり上等でないおしるこを振舞ってもらう。

あたしは「長吉」という、まつ黒な古人形を持っている。長吉はねずみちりめんむく無垢うわぎの上衣、緋ひぢりめん無垢の下着、白の浜縮ちりめんのゆまき、緋鹿ひの子のじゅばんを着ている。それらは古びきつているが、祖母が江戸へ来てから新らしく縫って着せたものだ、祖母はその長吉人形を抱いて十九の年に下向したのだ。

なんで江戸まで出てきたのかというと、ほうそう 疱瘡を病わづらっているとき、あんまり許いいなずけ嫁の息子とその母親が、顔を気にして見舞いに來るので、ある日、赤木綿の着物に、赤木綿の手拭で鉢まきをし熱にかされたふりをして、紅提灯をさげて踊り出し気の弱い許嫁おやこ母子を脅おどかして、自分の方から愛想ずかしをさき廻りにしてしまった。こんなところは面白くないと、江戸の兄をたよつて出て來たのだつた。小りんという名も、よい容きりよう貌も疱瘡でお安くなつたというのと、いえのことぶき屋いえ 寿と祝つて、祖父と家をもつときに取りかえたのだ。

祖父は九歳の年に、ほか他の子供たちと一緒に、長い年間で大丸呉服店へ小僧でっち奉公に下つたのだ。父親はもう亡なくなつていた。足弱は

三人ずつ、三方さんぼう荒神こうじんという乗りかたで小荷駄馬へ乗せられて来たのだ。子供の旅立ちを見送りに来た親たちに、顔を見せると、すぐに桐油布とうゆを被かぶせてしまつて、子供たちに里心を起させないようにしたという、みじめさだ。父親に早く別れなければ、祖父もそんな辛棒が出来たかどうか、祖父の母も手離しはしなかつたであらう。彼女はそのまま、九ツで江戸へよこした息子に逢わないで死んだのだ。その女ひとは、あきらめきつた悲しい手紙を息子へよこしている。

残暑つよくおはし候へども、いよいよ御無事にお勤めなされ候や嬉しくさつしまゐらせ候。私も五月末つかたより病氣にて、大きにこまり入申候、なれども、二、三日づつはよひ日

もあり、またまたあしきこともおほく御座候へども、当月に相成り、いつかう少々もたへまなく打ふし居申候。命の限りはわかり不申候へども、まづ今の病氣の様子にては、あまり長いきも出来不申と心得、もはや、ていはつ（剃髪）いたし、なむあみだ仏のみ心がけふして居申候。しかしながら、このたびは栄吉が至つてていねいに世話してくれ候ゆへ、何も不自由もなし、誠に嬉しく仕合に存候。

こんな手紙を見た、年期中の親孝行な^{せがれ}倅はどんな心持ちであつたらう。そうした^{ならわし}習慣が、祖父を辛棒つよい、模範的な町人にしてしまったのであろう。祖父の母は^{うたよみ}歌人で、千町^{ちまち}といつたというのだが、千町とは聴きあやまりであつたのか、千^{ちかげ}蔭の門人に

その名はないという。祖父も手跡はよく、近所の町の祭礼のおおの大おほ幟ぼりなど頼まれて書いた。

そうした優しい男と、生れた時に祝ってもらった、京人形長吉を抱いて、振袖で、通し駕籠かごで江戸まできて、生涯に一度、また通し駕籠で郷里を訪れただけの祖母との新世しよたい帯は、それでも琴瑟んしつ相和したものと見えて、長吉のしめている帯は、祖父が仕立て、時の將軍様のもちいた錦にしきのきれはじであり、腰にさげているしやうじやう猩々びんちやく緋の巾着ちやくは、おなじく將軍火事頭ずきん巾の残り裂ぎれだという。その時の將軍は十一代徳川家いえなり齊なりである。奢侈しやしを極めた子福者、子女数十人、娘を大名へ嫁かさした御守ごしゆでん殿ばかりもたいした数だという。後に大御所とよばれ、徳川幕府をひへいさせた近因だと

もよばれたほど、派手な時世だった。

アンポンタンはこの祖おじいさん父ちちの歿後ぼつご、母が嫁して来たので、生

きていた日は知らないが、善良な小市民の見本であつたらしい。

長い間には、気がさな細君こぎみに、どんなにハラハラさせられたかし

れないであろう。水野越前みづのえちぜんの勤儉御趣意きんけんごしゆいのときも、鼈べつこう甲こうの

筭かんざしをさして、外出するときには白紙かみを巻いて平気で歩いたが、

連つれあい合あ卯兵衛うべゑが代つてお咎とがめをうけたのだ。

小りんさんが卯兵衛うべゑ旦那だんなの、浮気の穴を探しだしたゆきさつは

面白い。初春のことで、かねて此このうち邸うちだと思ふ、武家の後家ごけの住

居をつきとめると、流していた一文獅子いちもんじしを引っぱつてきて、賑わ

しく窓下で、あるつかぎりの芸当をさせ、自分は離れた向う角に

いた。近所からあつまつた見物や子供たちはよろこんで騒ぐので、思わず卯兵衛さんが顔を出し、目的の女も顔を見せた。そこで騒ぐのでも訪れるのでもなく、小りん女房はニツコリと帰って来てしまふという手だ。卯兵衛さんの閉口したことはいうまでもなからう。

二人の間に二人の男の子があつて、上は（前出テンコツサン）出走人となつてしまつた。わたしの父はいたずらツ子で、お母さんを困らせようとして、叱られたときに、大事にしていた長吉人形の前髪と、やつこ奴さんと、ジジツ毛を、はさみ鋏ではさんでしまつた。大きくなつてからも、両親が蔵の縁の下に、金を埋てあるのを、いつの間にか虎太郎五十両拝借と書いた、つけぎ附木一枚を手形がわりに

して持つていったりしたことを、風通しのよい、青い林檎りんごの実つたのが目のさきにある奥二階の明り窓のきわで、小粒こつぶや二朱金にしゆきんを金かな盥だらひで洗つたり、糠袋ぬかのような小さい麻の袋に入れかえるとき、そばにかしこまつているアンポンタンに、

「いたずらもせぬような男の子はだめだ。」

というふうなことを言った。町ではのれんをはずす忙しい夕暮れかた、褌つまをとつて、小路の角に祖母は時折たたず佇んで、どこともなく眺めていた。祖母の箆たんすの引出しには、そっくり手のつかない、男ものの衣服が、したおびまで揃えてしまつてあるのを、誰も気がつかないふりをするのだつた。自分の死後の白小袖もちやんと羽二重でつくつてある人だつた。見すばらしくしてかえる年老い

た息を心に描いていたものと見える。そんな時、あわれげな人が通ると、懐に入れて出た小金を、みんな、その人の掌にあげてやっってしまうのだった。

^{せがれ}倅虎太郎はあたしの父の若いおりの名で、祖母が老てからは実によく孝養した。

小りんさんは檀^{だん}家頭^{かがしら}なので、お寺へゆくと、和尚たちが心置きなく、

「御隠居さんはこの位までかな。」

と置^よへ米^ねという字を書く、坊主は金がほしくなったので、ひとの葬式を待っていると笑ったが、八十八歳の三月、明治天皇銀婚の御祝いに、養老金を頂いて、感激して、みんなにお赤飯をふる

まい、ずらりと並べて箸はしをとらせ、見ていて死ぬともしらずに死んでいった。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

西川小りん

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>